The 79th Independence Day of India　第79回　インド共和国 独立記念日

インド大統領
ドラウパディ・ムルム氏

躍進「世界の成長センター」

1947年８月15日に英国から独立したインド。今や世界１位に躍り出た人口や強力な産業振興策と都市化の進展を背景に各地から投資を引き寄せ、世界の成長センターとしてのポジションは明確になっている。同国の今後のさらなる成長を日本はどう生かすべきか。経済面のみならずさまざまな分野で、印日パートナーシップの拡大が注目されている。

インド首相
ナレンドラ・モディ氏

INTERVIEW

駐日インド大使　シビ・ジョージ氏

印日科学技術イノベーション交流年－連携拡大

印日の経済連携は従来のインフラ関連や大手製造業にけん引されて、中堅・中小企業へも多層的に広がっている。シビ・ジョージ駐日インド大使は、両国のパートナーシップをさらなる高みへ引き上げるべく、2025年から2026年を印日科学技術イノベーション交流年として、連携拡大を呼びかけるなど精力的な活動を続けている。79回目の独立記念日を迎えて、その意義やさらなる連携策の進め方を聞いた。

ＤＸの旗手

―インドにとって、独立記念日はどのような意味を持つ日ですか。

「独立記念日はインドが変容していくうえで非常に重要なマイルストーンだ。2047年の100年の時には貧困をなくし、先進国となることを目標としており、毎年そこに近づくための指標となる。インドは世界最大の民主主義国家であり、昨年は有権者10億人近くが参加した選挙が行われた。ＣＯＶＩＤ－19の後も急速な経済回復で毎年、６－７％の成長率を維持し、国中のどこでもデジタルで決済や手続きが行えるようデジタル変革を成し遂げている。科学技術も飛躍的に発展しており、月探査機が月面着陸を果たした。こうした社会基盤や科学技術や経済面の成長だけでなく、独立国としてテロリズムを一切許さない、強固な国になっていく」

大阪・関西万博のインド館「バーラト」では、月探査機のチャンドラヤーンを紹介

日系進出10倍目指す

―印日の経済関係強化をどう評価していますか。また今後10年後を見据えた場合、どの分野での連携強化を考えますか。

「インドの経済発展において特にベースとなるインフラ面で、日本との重要なグローバルパートナーシップなしでは説明することはできない。スズキが40年以上前に進出し、インドの自動車産業成長を実現した。20年ほど前に日本の支援でできたデリーメトロは都市モビリティーの変容をもたらした。今は工事中を含め、インドの20都市でメトロ交通網が実現されようとしている。現在、約1500社の日系企業がインドへ進出しているが、私のビジョンは早期に10倍の１万5000社に増やすことだ。メイク・イン・インディアからメイク・フォー・インディアへ、さらにアフリカや中東、日本の成長にもつながる〝メイク・フォー・ワールド〟を実現できる」

インド政府科学技術省に属するアリヤバッタ観測科学研究所では印日国際研究が進む

大学・研究機関が交流

―日本との関係をさらに強化すべく、印日科学技術イノベーション交流促進年として、特に科学技術分野での連携にスポットをあてておられます。

「40年前、印日科学技術協力協定締結が結ばれたのに起因する。交流促進年を進めるにあたり重視するのは、印日での大学や科学技術研究機関同士の交流拡大だ。インド工科大学やインド科学研究所など著名な研究機関が多数あり、そういうところを中心に日本の大学や研究機関との共同研究、学生や教員間での交流を強化したい。インドの基幹技術として、半導体、レアアース、ロボット、ドローン、宇宙の分野を特に注視して、イノベーション交流を進めていく。地震や洪水、津波などの災害対策強化や、また世界が直面している気候変動を乗り越えていきたい。防衛技術や防衛装備の点でもさらなるテクノロジーでの連携強化により、平和と安定、繁栄を実現できるのではないか」

大使館に中小支援組織

―日本の中堅・中小やスタートアップがインド市場で活躍するための支援の状況は。

「大使館内に２年前から中小企業連携を実現していくための組織体を設立しており、さまざまな相談が寄せられている。日本の10万の企業にインドとのビジネスを検討していただきたいと考え、目標を達成するため、東京だけではなく地方も含めて47都道府県すべて訪問している。商工会議所、地方銀行など、地方にある中小企業にリーチするさまざまな関係者と懇談を重ねている。インドの成長の機会を逃さないでいただきたいということを今後も伝えていきたい」

インドとともにつくる事業成長

GSI Creos　ＧＳＩクレオス

化学品軸、インド全土に展開

2023年に設立したＧＳＩ　Ｃｒｅｏｓ　Ｉｎｄｉａ（ＧＳＩインド社）は、ムンバイを拠点に成長著しいインド市場の開拓を進め、化学品事業を中心にビジネスの拡大を図っている。近年需要が高まる環境配慮型のスペシャルティ化学原料や化粧品原料の輸入販売のほか、グローバルネットワークを活用した地場商材の輸出販売も拡大している。

経験豊富なケミカル業界のスペシャリストによる現地マーケティングを通じた、日本の仕入先への迅速かつ丁寧なサービスの提供、現地パートナーとの協力や現地人材の育成などを手がける。日本とインドの架け橋となり、将来的にはインド全域での市場拡大とブランド確立を目指す。

（https://www.gsi.co.jp/）

ホームページ

ＧＳＩ　Ｃｒｅｏｓ　Ｉｎｄｉａのラールバハードゥル・サワント社長は豊富な経験でクライアントをサポート

Konoike Transport　鴻池運輸

期待超える新サービス創造

鴻池運輸を中核とするＫＯＮＯＩＫＥグループは、成長著しいインドを「注力地域」に位置づけ、社会の期待を超える新たなサービスの創造を目指している。

2008年の進出以降、国際フォワーディング、プラント移設などのエンジニアリング業務、鉄道コンテナ輸送や自動車の鉄道輸送などを展開。メディカル事業では、医療器材の滅菌サービスのほか、日印両政府や医療関連機関と構築した良好な関係をベースにした日系企業のインド医療市場進出サポートも手がける。2025年には現地の鉄鋼スラグ処理会社を買収。日本の製鉄所で培ったノウハウを生かし、インド鉄鋼産業の発展に寄与するべく新たな挑戦を始めている。

（https://www.konoike.net/）

ホームページ

鉄道コンテナ輸送や自動車の鉄道輸送などを展開

TKE　ティーケーエンジニアリング

高度インド人材が担う３Ｄ造形

金属３Ｄプリンターを使った造形技術を強みとするティーケーエンジニアリング（愛知県弥富市）は、インドの理工系大学を出た人材が多数、エンジニアとして活躍している。ＩＴ系の知識を生かし、金属３Ｄプリンターの性能を引き出す設計・開発業務に携わる。インド人材の採用は2024年にＮＩＴＴＥ大学（カルナータカ州マンガロール市）の卒業生３人を採用し本格化した。現在８人採用し、今後３－４年で30人程度まで増員する。

多様性を成長の源泉の一つに据える。入社後もさまざまな配慮を心がけており、同僚の日本人社員と観光に出かけて親睦を深めるなど、特にコミュニケーションを促す雰囲気づくりを大切にしている。

（https://www.takao-net.co.jp/tke/）

ホームページ

多くのインド人技術者が活躍する

OG CORPORATION　オー・ジー

モノづくり・トレーディング機能活用

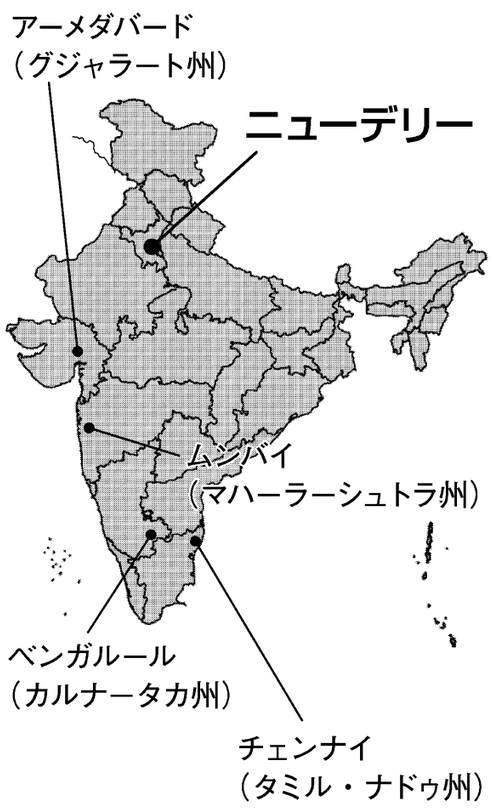
オー・ジーのインド現地法人ＯＧ　ＣＯＲＰＯＲＡＴＩＯＮ　ＩＮＤＩＡはモノづくりとトレーディングの機能を活用し、現地に根差した事業を展開している。関連会社のＭＥＬＯＧ　ＳＰＥＣＩＡＬＩＴＹ　ＣＨＥＭＩＣＡＬＳなど多数パートナーと協働し、品質レベルの高い機能化学品を供給。またＡＲＶＩＮＤ　ＯＧ　ＮＯＮＷＯＶＥＮＳのニードルパンチ不織布は集塵機用バグフィルター向けに国内外へ拡販している。

ムンバイに加え、2024年５月にデリーに拠点を開設し、主に合成皮革分野での活動を開始。25年４月にはアスファルト応用加工製品の製造や道路舗装事業を行うニチレキグループと合弁会社を設立。インドのさらなる発展を支えていく。

（https://www.ogcorp.co.jp）

ホームページ

ＯＧ　ＣＯＲＰＯＲＡＴＩＯＮ　ＩＮＤＩＡが入居するビル外観



インド基礎情報

人口：
14.5億人（国連推計2024年）

面積：
329万平方キロメートル（日本の約９倍）

名目GDP：
約4.19兆米ドル（2025年、IMF）

統治：
連邦制（28の州、８の連邦直轄地）